

# 届け 世界の果てまでも

令和2年10月27日

No. 43

文責 校長 飯久保一男

## いじめの温床

教育心理カウンセラーの富田富士也さん（「引きこもり」という言葉の命名者です）が『子どもの悩みに寄り添うカウンセリング』という本にこんな話を載せています。



Fさんは小さいころから自分の体型に敏感でした。親せきに行くと姉は「かわいい」と言われるのに、Fさんは「体格がいい」としか言われませんでした。このころから、いつの間にか他人と比較ばかりして悩む子になりました。母親からは「気にしないことが一番」と言われて育ちました。小5になると周囲のからかいを勉強で跳ね返し、母親の忠告を守って、体型のことを言われても「私、気にしていないもん」と笑い飛ばすことにしました。

Fさんは中学では、バスケットボール部に入りました。顧問の男性教師から「ケツが大きい」「足が太い」と言われても母親の“しつけ”をかたくなに守りました。「怒れば『冗談のわからないヤツ』と思われるだけなので、『表面は傷ついてないよ』と笑みを浮かべていたけど、心の中はズタズタに傷ついていた」とFさんは振り返ります。

中1秋の球技大会のバスケットボールの試合でFさんのフリースローが入れば同点というチャンスがめぐってきました。精神統一をするFさんに「デブ、デブ」という“デブコール”が襲いかかりました。動揺したFさんのフリースローは外れ、試合は負け、みんな泣きました。でもFさんの涙は、こうまでして母親の“しつけ”を守り続ける自分のみじめさでした。

「弱いのはわかっている。耐えなければならないこともわかっている。

みんな幸せになってください。もう何も感じないのです。さようなら。」

Fさんはこう書き残して、薬を飲み、手首にカッターナイフをあてました。幸運にも、母親の早い発見で死はまぬがれました。入院中、ずっと付き添った母親は、学校でも家庭でも孤立無援だったFさんの心の傷を、忍耐強く受容と傾聴で癒していきました。“しつけ”のよろいを脱ぎ去り、「つらかった」と弱音を吐かせることでFさんの心は徐々に癒されていったのです。



入院先の庭で、腰をかがめ、じっとアリの後を追うFさんの目は、いつまでもその小さな生命を見つめていました。

笑顔で過ごしていたり、気にしていないような受け答えをしていたり見えても、心の中で傷ついていることはあるものです。体型や見た目など本人にはどうすることもできないことを言って傷つけることも子どもの世界では意外とあります。甘やかしではなく、甘えられる場所＝子どもが弱音を吐ける場所があることは大切です。いじめの温床はどこにでもあります。いじめに当たる行為に、教職員や保護者、そして子どもたち自身が気付けることが大切です。



以前に「いじめられている君へ」のコラムに“さかなクン”の話が載っていました。(一部省略してあります。)



たとえばメジナは海の中で仲よく群れて泳いでいます。そのメジナをせまい水そうと一緒に入れたら、1匹を仲間はずれにして攻撃し始めたのです。ケガをしてかわいそうなので、そのメジナを別の水そうに入れました。すると残ったメジナは別の1匹をいじめ始めました。助け出しても、また次のいじめられっ子が出てきます。

いじめっ子を水槽から出しても新たないじめっ子が表れます。広い海の中ならこんなことはないのに、小さな世界に閉じこめると、なぜかいじめが始まるのです。同じ場所にすみ、同じエサを食べる、同じ種類どうしなのに…。

中学時代のいじめも、小さな部活動でおきました。ぼくは、いじめる子たちに「なんで？」と聞けませんでした。でも仲間はずれにされた子とはよく魚つりに行きました。学校から離れて、海岸で一緒に糸をたれているだけで、その子はほっとした表情になっていました。話を聞いてあげたり、励ましたりできなかったけれど、だれかが隣にいてだけで安心できたのかもしれない。

よく識者が「集団で暮らす中には、必ずいじめが起こる」などと話すのを聞きます。上記のメジナのように、ある意味、仕方がないことなのかもしれませんが、理性のある人間は、魚とは違います。

集団の質が問われるのだと思います。いじめや仲間はずれが起こらない集団もあります。その集団のリーダー、指導者の力により、いじめや仲間はずれが起こらない場合も多くあります。教師がいじめは絶対に許さないという姿勢を示すことによって、いじめは防ぐことができると信じます。もちろん、保護者がいじめをしない子に育てることが前提です。

しかし、いじめの温床はどこにでもあります。うちの子に限ってと思わずに、アンテナを高くしていく必要があります。自分はいじめだと思っていなくても、相手にとっては傷つく言葉だったり、行動だったりすることが、いじめとして報告されることも多くあります。自分の子どものことに限らず、気になるようなことがありましたら、担任や学校に情報をお寄せいただきたいと思います。情報元を明かすことは絶対にしません。



地域・保護者・学校が、ともに子どもを育てる学校であること・楽しい学校であることは、いじめのない学校であることが絶対に必要な条件です。

横浜の公立中学校の校長先生方が、**いじめない子**はどんな家庭に育てているかを調べた結果があります。

- 親が子どもの生まれたときの話をよく伝え、大切な子宝としてあたたかく育てている。
- 親が子どもの学校生活をよく理解し、指導するとともに地域社会への参加、奉仕活動に熱心である。
- 親自ら、あたたかい雰囲気の家をつくり、家族一人一人に存在感を与える。
- 親が人の悪口を言うのではなく、ほめるように努めて、感謝して生活する。
- 親が子どもに「誰にでもよいところがあるので、そのよさを認めて、仲よくしなさい」と声をかけ、よりよい人間関係がつかれるように支援する。
- 親自身が目標をもって生きがいを見つけ、子どもに目標を見出させ、それに向かって努力することができるように励ましている。